

50号記念特集

野鳥たより

—北海道—

第 50 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和58年 2月21日



フクロウ 江別市野幌森林公園 1982.5 撮影 林 大作



野鳥だより50号を記念して

会長 井上元則

平素、会の運営にあたり、皆様方よりいろいろお世話になり、まことにありがとうございます。

この度の第50号発行を記念し、会の歩みなどについて、一言述べてみたいと思います。

北海道の野鳥の愛護運動を推進するために昭和44年11月17日道庁本庁舎7階会議室に、発起人及び札幌周辺の有志三十数名が集まって協議の結果、45年5月を目処に結成総会を開くことになりました。

野鳥愛護会は、全道野鳥愛好者の連絡組織として各種の情報の交換や、資料や、研究の場を提供し、一面に於ては野鳥保護思想を普及するための指導者を養成しようとするものであります。

昭和45年5月9日、労働会館大会議室で創立総会を開催し、北海道野鳥愛護会が結成されました。野鳥だよりの第1号はその準備会の途中、同年2月10日に印刷されています。

犬飼哲夫先生が、その後十年余り会長として本会発展のため御指導下さいましたことは、まことにありがたく会員一同心から厚く御礼申し上げます。

本会創立当初は北海道林務部林政課猟政係の所管でありましたが、昭和46年7月1日環境庁ができて、道庁には自然保護課が同年8月にできましたので、野鳥愛護会の指導監督は自然保護課扱いとなり現在に至っています。当初の鳥獣保護課係長は安田鎮雄氏で林務部林政課から自然保護課へ移行されたもので、本会としては非常に御苦労をかけたものと思います。

本会の会員数は創立当初（昭和45年度）約350名で、昭和49年には約500名となっています。創立当時の役員は野鳥だより第2号12頁に載っている通りであって、はじめのころは安田鎮雄、野村梧郎、百武充、萩千賀氏等に多大のお世話になりました。

さて振り返ってみますと、50号を出すまでの間に、いろいろな出来事がありました。最初鳥獣行政の指導下にスタートした本会が、今日のような民間サイドの独立した団体に移行するまでには幾多の余曲折がありました。

経理面、雑誌編集、事務所移転問題など、いろいろ苦しいこともありましたが、役員の方々の善処で難を切り抜け、今日では北海道になくはない立派な会誌に育ちました。

そのかげには、道の鳥獣行政遂行上の資料として、会報発行の都度5万円程度の買上げがあったことを忘れることはできません。

探鳥会を通じて横の連絡を密にされ、北海道野鳥愛護運動の原動力となったことは本当に喜びにたえません。探鳥会の場所としては、札幌周辺が多く藤の沢、藻岩原始林、石狩川河口、福移、野幌森林公園、植苗、ウトナイ湖、鶴川、小樽港がとり上げられ、遠い所では愛山溪、十勝岳温泉などがありました。最近野鳥ブームの影響をうけて、探鳥会も参加者が次第にふえてきていることはまことによるこばしく、多年御指導下さったリーダーの方々に厚く御礼申し上げます。

私は創立以来の会員で、本会ができたころの探鳥会にはかかさず参加しました。1000ミリの大望遠レンズを石狩川河口、鶴川、ウトナイ湖などに持っていったので、1000ミリ先生というあだ名を頂戴したほどで、本会のおかげで多大の野鳥資料を得ることができました。

後年北国の自然と野鳥、北海道の野鳥（原色生態図鑑）、北海道の自然Ⅰ—野鳥—、森に生きる—野幌原生林と共に—、などを書きましたが、これらは野鳥愛護会に参加したおかげと感謝しております。また私は昭和7年に日本鳥学会員となり、昭和53年には日本鳥学会賞を受け、現在は名誉会員となりました。

どうか皆様方も御健康で、長く斯道につくされますようお祈りいたします。（北海道栄養短大名誉教授・農学博士）

会報50号記念を祝う

(財)日本野鳥の会 小樽支部長 佐々木 勇

北海道野鳥愛護会が12年も継続し、会報野鳥だより50号の記念号を発行するに至ったことは、即ちそれだけ野鳥運動に貢献して来たことであり嬉ばしいことと思う。

僅か13年前頃は名称のみで実質的には活動する野鳥団体が無かったことを想うと、北海道野鳥愛護会のような有力な組織団体が、12年も継続したことは隔世の感がある。これが刺激となつてか、今や道内には十指以上の野

鳥運動の組織団体が出来て、その数では県単位では全国一を誇るまでに成長した。その内でも何と云っても北海道野鳥愛護会は多数の会員数と、道内一の立派な会報を持っていることで、頭角を現わしていると云うことが出来る。これも一に長い間、編集に携って来られた人材とそのボランティア精神での、献身的な努力によるものと感謝しなければならぬ。

会報50号の発刊に寄せて

安 田 鎮 雄

第1号は準備会が発行

北海道野鳥愛護会が発足したのは昭和45年5月であるが、会報第1号はその年の2月に創刊された。だから創刊号は愛護会結成準備会の発行なのである。愛護会の結成準備会はその前年11月17日に道庁会議室で開かれた。

当時、道内には既存の団体として日本野鳥の会の札幌、小樽、江別、釧路支部があり、その団体の代表や、鳥獣保護員、動物園、狩猟団体、営林局、道林務部等から約30名が出席した。この会合で保護団体の創立を確認、結成にはできるだけ多くの会員を集める必要があり、宣伝パンフの目的もかね第1号の発行となった。

こうして、マスコミを利用した甲斐もあり、遠くは神戸、京都、東京の本州勢も加え約500名の会員を集めた。4月10日には創立準備会を開き、会運営の下準備をした。そして愛鳥週間に先立つ5月9日に創立総会となったのである。その翌日、設立を記念して第1回探鳥会を実施、早朝6時30分にバス2台を連ねて野幌森林公園へ赴いたが、当日の参加者は120名で、一応は華々しいスタートであったといえよう。

愛護会発足のウラ話し

野鳥保護団体の結成は、昭和38年頃から道行政内部では話題になっていた。この年に「狩猟法」が「鳥獣保護及び狩猟ニ関スル法律」となり、行政の目的は保護と狩猟の両極を結んで進めなければならなくなっていた。

ところが、中央には日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟の2大潮流があり、どちらの支部を育成するか、中央とのメンツの問題があった。昭和43年には北海道猟友会が法人格を得て独立した。鳥獣行政は片ちんばになってしまったのである。当時の林政課長は湊武さんであるが、「鳥獣行政は保護と狩猟が車の両輪なのに、それが片輪では法律の目的にそぐわないではないか」と叱責される始末であった。それならば……と、中央のメンツをかなぐり捨て、道内独自の保護団体の育成に踏み切ることにした。構想をまとめる段階では、林務部次長の佐々木正雄（故人）さんの力強いアドバイスがあった。

「ほんらい野鳥保護思想の普及は道庁の行政の仕事であるが、それを民間に委託する考えをとればよい」

ということで、会報の発行費とか、探鳥会等の諸経費を普及費に組んで、それを支出できるようにした。このため、愛護会の設立と、道としての指導援助についての異例な部長決裁となったのである。

設立にはこうした官制的な匂いはあったが、当事者である私たちは、官制など念頭にはなく保護思想の普及と、

保護運動を第一義として取り組んだ。名称については、保護会とするか、愛護会とするかで論議があった。愛護会では「飼い鳥」愛好会と間違われるとする意見もあったが、保護会では官制主導の匂いが強い。さしあたりは野鳥への認識を高めることが先決、保護運動はその中から育てようということで「愛護会」とした。

会報の名称は、当時の道猟政係で鳥獣保護員向けの「猟政だより」を発行していたので、「野鳥だより」としたが、それは野鳥から人間への呼びかけの意味も含まれていたのである。題字はふと見たポスターにこんな字体があり、須田製版に凶案化していただいた。この題字が50号続いてきたことに感無量である。

これからの運動に望む

私が会報を手がけたのは最初の10号ばかりで、その後は、環境庁に選られた百武 充さんが担当した。いまは愛護会も道庁から独立し、編集委員会も置かれてスタッフも強化されているようだが、それだけに財政面が厳しいものと思う。

いつかの会合で、財政の危機的状態が報告されていたが、こうした団体が爆発的に組織を拡大することは困難で、妙案があるわけではない。もし可能ならば、初心に立ちかえることも一つの方途であろう。

会員の中にもいろいろな思想があろう。そこに野鳥がいるからなんとなく見たい人、写真を撮ることに熱心な人、動物の研究をしたい人、ある特定の鳥獣に興味のある人、野鳥の生命のために殺傷を憎む人、人間の未来のために開発阻止を叫ぶ人、こうした諸々の人を載せた愛護丸の運営はなかなか難しいと思われる。また最近の低経済下では、野鳥保護どころでない、という風潮さえ生じている。

私が会に望みたいことは、愛護会はもの言わぬ鳥獣の代弁者になってほしいことである。裁判に置ける弁護士は、罪のいかんに拘わらず被告の弁護人である。守る側は守ることに徹すべきであり、開発と保護との調整などという言葉は、保護側が用いてはならない。そうでなければ、いつの場合も保護側は外堀を埋められた状態で開発側と戦わなければならないのである。

☎ 061-01 札幌市豊平区月寒東4条18丁目3の23

創世紀のころ 百武 充

私が北海道に住むようになったのは昭和43年の春からですが、札幌ではじめて参加した探鳥会は、その年の愛鳥週間に円山動物園が主催したものでした。

当時、道内の野鳥関係の団体として、日本野鳥の会の支部が4つあることになっていましたが、そのうちのあるものはまったく名前だけの存在で、実質的な活動は行なわれていませんでした。札幌で催される探鳥会は動物園主催のが年1〜2回あるだけという、いまから考えると信じられない低調ぶりだったのです。

その探鳥会には道庁で猟政の係長をしておられた安田さんに誘われて参加しました。朝7時集合にもかかわらず数十名の人が集まり、リーダー不足で散漫な結果であったように記憶していますが、コムドリやキビタキなどが見られて、よい季節の散策と考えれば悪くない行事だったと思います。

翌44年もやはり同じ催しがあり、また参加しました。集まった方の中に前年もいらした方が何人かあって、それらの方と話しているうちに、このような行事が年1回だけでなくもっとあればよいのに、という希望が多くありました。その方たちのお名前を伺ってメモしておいたのが、後で非常に役立つことになりました。

このころ、高度成長経済の必然的副産物として生じた公害や自然環境の破壊が社会的に大きな問題となり、全国に自然保護団体が続々と結成されていた時期です。

北海道野鳥愛護会も、このような時代背景の中で、市民サイドからの要求と行政サイドの姿勢がうまく合って生まれたわけですが、それまでに保護団体結成の試みが何回かあっていずれも成功しなかったにもかかわらず、機を捉えて結成にこぎつけた安田係長の手腕を讃えるべきでありましょう。たまたまこの時期に道庁にいたお陰で、愛護会創世紀のお手伝いできたのは、私にとってまことに幸いでありました。

さて、正式発足前の45年2月に準備会発行の北海道野鳥だより第1号が出、年度の代わった5月には結成総会と野幌森林公園での第1回探鳥会が相次いで行なわれ、いよいよ会が滑り出しました。前年お名前を伺っていた方々にも御案内を差上げ、ある方には最初から役員として会の運営に参加していただくことになりました。

会がスタートして探鳥会が年数回のペースで行なわれるようになりましたが、まだリーダーの人数も少なく、プロミナーの砲列ができるということもなく、まあどかな時代だったのですね。でも続けているうちに熱心な方も生まれて、現在に至っているわけです。私は49年に札幌を離れるまでお手伝いさせていただいたわけですが、ここで側面史の方を書いておきたいと思います。

それは、「私設・野幌森林公園探鳥散歩」と銘打ってはじめた野幌を歩く会のことです。会の探鳥会を3回ほど行なうと、早くも、鳥を見るのがすごく楽しい、とおっしゃる方が何人か出てきました。たしかに、覚えはじめのころというのは、出かけるたびに始めて見る鳥がいるし、それらの鳥たちは皆はつつつとして一生懸命生きていて、まったく自分はどうしてこんな面白い世界を知らずに過してきたのだらうと感じられるものです。

でもまだ一人で鳥を見に行く自信まではない、となると、探鳥会が年数回しかないのはもの足りない、という声が出るのも当然です。たまたま私は住いの近くに野幌森林公園というすばらしいフィールドがあるのを知り、月に1、2回は歩いていたので、野鳥だよりを通じて呼びかけ、45年の9月からはじめたのでした。最初の日、集合場所の大塚駅待合室に、いったい何人の方が(そしてまた、どんな方が)来て下さるのかとスリルがありました。第1回はたしか私共夫婦コミで5人だったと思います。

▼ スキー探鳥会(野幌森林公園)



10年前の野幌森林公園は、国有林によって歩道などが整備されつつありましたが、5月の連休と夏休みの他は訪れる人も少なく、まことに好ましい雰囲気を持っていました。何回か歩くうちにお互に気心も知れて、たいへん楽しい時間をここで過しました。はじめてよかったといまも心暖まる思いがします。また、冬にスキーや輪カンジキをはき、雪の中を鳥を求めて歩いたこともありました。個人でスキー探鳥をしていた人はそれまでにもいたでしょうが、私的集いとはいえスキー探鳥会をやったのは、もしかすると日本ではじめてではなかったかと、ひそかに自負しているのですが。

あと、会の行事で思いきって大雪山(愛山溪〜沼の原)に遠征を計画してみたり、思い出は尽きません。

野鳥だよりも50号になって、感慨無量なものがあります。愛護会がこれからはますます発展され、北海道の自然をまもる大きな力となりますよう、お祈りしております。

☎ 907 沖縄県石垣市登野城 589-9-104

北海道野鳥愛護会と私

羽 田 恭 子

円山の山肌は、まだ雪に覆われているが、木々の梢はほんのりと赤らんでみえる。大気もふんわりと暖かく、もう帽子も手袋もいらぬ。

そんな早春、双子山を左手にみて緩斜面を下って行くと、日当りのよい南斜面は雪が融けて、固く締まった雪の下から、濡れ濡れとした笹が顔を出している。雪の下の側溝を、ちょろちょろと雪解け水が流れる音がする。その時、笹の上を動くものがある。凝視すると、それは全身に春光を受けて、金属光沢にピカピカと光り輝く立派なキジであった。すごいなあ、堂々とした野性の見事さに、しばし圧倒されて、その場に立ちつくした。これは十数年前で、その頃は鳥の名前を全く知らなかったが、日の丸の鉢巻をした桃太郎が、お供に従えていたキジの姿は、幼時の童話の世界でお馴染みであった。キジだ。間違いなくキジだと、一人で興奮したものです。

それから一週間程後に、同じ坂道を下って行くと、「ホーホケキョ」とウグイスの音がする。見ると、15mほど先のニセアカシヤの枯枝で、喉をふくらませている鳥がいる。じっと立ち止っていくらみても、鶯餅のような鶯色ではない。おかしいなあ、でも目の前で唄っているのです。梅の木でもないしー。一茶は、「三日月やふはりと梅にうぐひすが」、蕪村も、「うぐひすや梅踏みこぼす糊塗」と詠んでいる。その頃の私は、梅に鶯という固定観念しか持ち合わせていなかったのです。鶯色でなかったこと、梅の木に止っていなかったことは、一つの疑問符として残った。

こんなことがあってから、気をつけていると、庭に名も知らぬ鳥がくる。図鑑をみて、あれかこれかと思っても、同じようでもあり、違うようでもあって思い迷うばかりであった。ずっと後になって、庭のツツジの下でミズを啄んでいたのは、アカハラであり、桜の枝に止っていた強烈な色彩の鳥は、キビタキの雄であったと判るのですがー。

鳥の名前を知りたいと思っていた時、動物園主催の早朝探鳥会が円山公園であった。その頃は、探鳥会が如何なるものであるかも判らず参加したが、指導者の方は、まるで手品のように、私には見えないところから、鳥を引き出して見せてくれる、という感じでした。「まっすぐ前のトド松の目の高さあたりの幹を、逆さに下りてきているグレーの背中のは、ゴジュウカラ」、「黒いネクタイをしたのは、シジュウカラ、その横のネクタイ無し黒いベレー帽は、ハツトガラですよ」とか、「ゼンマイを巻くように、ギーッといったのは、キツツキの中で一番小さいコゲラです。」などと、次々と教え

てくれる。「盛んに囀っているのがアオジです。ゆっくりしたテンポでしょう。」といわれても姿は見えない。どうしてそれと判るのかしらという思いの方が先で、その頃には、多くの鳥たちの囀りの中で、頭の中が、ごちゃごちゃになって、説明のつかない興奮が渦巻くばかり。最後に、動物園の中に入り、ゲージの中に飼われている鳥で、今みてきた鳥の復習です。「さっき、沢山鳴いていたアオジが、ほら、その鳥ですよ」と、指さされると、自然の中では木の葉隠れであったのが、間近に姿をみせることで、いくらか納得できるような気分がしたものです。

その折、年一度の探鳥会だけでなく、鳥のことを教えてくれる機関はないのかしらと尋ねると、リーダーの方は、「今、そのような会をつくろうとしています。」といわれ、私の住所と氏名をきかれた。

もう鳥のことなど、すっかり忘れていたその年の秋のことです。一通の封書がきた。北海道野鳥愛護会(仮称)の設立準備会とある。場違いのところに顔を出すことになるのではと危惧しながら、恐る恐る道庁に出かけた。これが、私と野鳥愛護会のおつきあいの始まりです。

翌45年に、北海道野鳥愛護会が発足してからは、すっかり鳥の魅力にとり憑かれてしまったのです。今、十数年を振り返って、鳥に夢中にさせたものは何かと考えるに、最初にすばらしい指導者に恵まれたということではないかと思う。根底には、鳥が、自然が好きだということがあるでしょうが、それを啓発して下さった方々です。今は、西表国立公園にいらっしゃる百武 充氏、帯広畜産大学の藤巻裕蔵氏、野幌森林公園事務所の野村梧郎氏。道庁にいらっしゃる安田鎮雄氏、梅木賢俊氏などが、愛護会創立当時の若手の指導者であった。鳥に対する識見はもとより、お人柄も立派な方々ばかりで、私は、鳥ブラス人にひかれて、野鳥の世界にのめりこんだといっても過言ではない。

その頃は、世間一般の野鳥に対する関心も現在ほどではなく、探鳥会の参加者も少ない時は、一対一で教えていただく幸運というのか、贅沢を味わったものです。

会の創立から十数年、今、色あせた野鳥だより第1号をみると、昭和45年2月10日 北海道野鳥愛護会設立準備会の編集となっている。それから50号、その間、多くの鳥たちを見、鳥を通じて多くの方々との出会いがあり、その後の交友を、私は、自分の人生の貴重な財産であると考えています。

☎ 064 札幌市中央区円山西町 3-3-26

愛護会のあゆみ

年月日	主な出来事
44 11 18	野鳥愛護団体設立準備会を開催し、準備会会長に北海道鳥獣審議会委員長の犬飼哲夫氏を選出。会の名称を「北海道野鳥愛護会」に、会誌名を「北海道野鳥だより」とし、事務局を道林務部林政課猟政係に置く。
45 2 10	設立準備会により北海道「野鳥だより」第1号(10頁)を発行し、入会案内を行う。会費、年額個人300円、団体1000円。
4 10	北海道野鳥愛護会創立準備会を開催し、創立総会開催日、役員選任方法、事業計画、「野鳥だより」の発行回数等を協議する。会員数 個人212名、団体9。
5 9	北海道野鳥愛護会創立総会を札幌市労働会館において会員43名参加のもとで開催し、会則の決定、役員選出を行い「北海道野鳥愛護会」が発足する。会長に犬飼哲夫氏を選出し、他に副会長4名、監事2名、幹事10名、参与7名、合計24名を役員に選出。事務局を北海道国土緑化推進委員会内に置く。
5 10	第1回探鳥会を江別市の野幌森林公園において開催。バス2台借上げ、49名参加。井上元則氏、隅田重義氏、野鳥保護の功勞により知事表彰をうける。
5 15	野鳥だより第2号発行(12頁)
5 16	野鳥教室を札幌市中小企業会館において開催。講師、安田鎮雄「野鳥保護」百武 充「野鳥の分類」野村梧郎「野鳥の判別」
5 17	札幌市円山動物園の探鳥会に講師派遣。
5 20	探鳥会予定箇所として定山溪、石狩浜、藻岩山の調査を行う。
6 6	
6 7	第2回探鳥会を藻岩山において開催、22名参加。
7 5	第3回探鳥会をウトナイ湖において開催、33名参加。
8 15	野鳥だより第3号発行(12頁)。幹事の百武 充氏が野幌森林公園の探鳥散歩を呼びかける。
8 29	幹事会を開催し、会誌の発行、会員名簿の発行等について協議。
9 15	第4回探鳥会を石狩浜において開催。バス借上げ、44名参加。
9 -	会員名簿を発行。
10 18	第5回探鳥会を野幌森林公園にて開催。

▼昭和45年4月 創立準備会を開催。



▼昭和45年5月 創立総会にて正式に発足する。



▼昭和45年5月 第1回探鳥会を野幌で開催。



▼昭和45年5月 野鳥教室を開催。



▼昭和45年7月 早くも?第3回探鳥会を植苗にて



▼昭和45年9月 第4回探鳥会 (石狩浜)



▼昭和46年5月 野鳥保護功労者の知事表彰式



▼昭和46年7月 探鳥会 (愛山溪温泉)



年月日	主な出来事
45 11 3	岡 清松氏、野鳥保護功労者として勲六等瑞宝章をうける。
45 11 -	野鳥だより第4号発行(12頁)
46 1 23	第1回新年懇談会を札幌市の林業会館において開催、会の運営、会報の発行等の自由討議、スライドの上映、以後、毎年、同様の形式で開催。
2 -	野鳥だより第5号発行(12頁)。以後、51年度まで、毎年度おおむね5月、8月、11月、2月の4回発行し、52年度からは、おおむね6月、9月、12月、3月の年4回発行頁数も12頁と固定化してくる。
5 8	昭和46年度の総会を自治会館において開催45名出席。 井上元則氏野鳥保護の功労により、農林大臣感謝状及び日本鳥類保護連盟理事長賞をうける。安田鎮雄氏、日本鳥類保護連盟褒賞をうける。佐々木勇氏、畠山周治氏、久万田国雄氏、脇田勝之進氏、知事表彰をうける。
7 3	大雪山国立公園、愛山溪温泉～沼の平において探鳥会を開催。バス借上げ、42名参加。
7 4	7 3の続き
9 15	鷗川海岸において探鳥会を開催。バス借上げ、参加者56名。
47 2 20	探鳥会。給餌台にくる鳥の観察を藤の沢の小沢広記宅において開催。参加者50名、50年以降は、1月の恒例探鳥会となる。
5 10	佐々木勇氏、野鳥保護の功労により環境庁長官感謝状をうける。大西重利氏、知事表彰をうける。
5 13	昭和47年度の総会を自治会館において開催23名出席。
5 14	野幌森林公園において探鳥会を開催。バス2台借上げ、78名参加。
6 18	講演と映画の集いを札幌農林会館で開催。自然保護協会と共催、60名参加。
7 22	十勝岳温泉において、探鳥会を開催。30名参加。
7 23	7 22の続き
48 5 14	北海道野鳥保護の集いを開催。北海道と共催、72名参加。
6 16	昭和48年度の総会を林業会館において開催19名参加。会則の一部改正、会費を値上げ個人300円を600円に、団体1000円を1500円に。
9 30	第1回全国一斉シギ・チドリ類調査に協力、以後昭和57年4月の第18回まで協力し、以後、日本野鳥の会各支部の対応となる。

年月日	主な出来事
49 5 -	久万田国雄氏、日本鳥類保護連盟理事長褒賞をうける。坂本正雄氏、知事表彰をうける。
5 16	北海道野鳥保護のつどい、道と共催で北海道厚生年金会館で行う。
6 29	昭和 49 年度の総会を林業会館において開催、17 名出席。
7 27	第 3 回 自然に親しむ会を東京大学北海道演習林において道自然保護協会と共催する。
50 2 16	野幌森林公園においてスキー探鳥会を開催、以後、冬の本会の恒例探鳥会となる。
8 29	昭和 50 年度の総会を北海道婦人文化会館において開催。
51 8 3	北海道新聞社主催、サントリー株式会社協賛の「支笏湖探鳥の集い」を後援、幹事 4 名が指導を行う。以後、毎年協力。
8 21	昭和 51 年度の総会を北海道婦人文化会館において開催。組織検討のための委員会を設置。
52 2 21	野鳥だより第 26 号から「鳥民だより」欄をもうける。
4 9	昭和 52 年度の総会を北海道婦人文化会館において開催、組織検討委員会の報告、会則の一部改正(会の目的、役員に関する事項総会開催月の定め等)、会費の値上げ、個人 600 円を 1000 円に、団体 1500 円を 3000 円に。
6 -	野鳥分布調査を実施
9 21	野鳥だより第 29 号から「探鳥地案内」掲載開始。
12 21	全道野鳥調査の結果がまとまる。
53 4 15	昭和 53 年度の総会を北海道婦人文化会館において開催。会務の自主運営を目ざす。
5 10	伊賀岩太郎氏、環境庁自然保護局長賞をうける。
7 -	北海道産業共進会場において開催された「子供博覧会」に協力
54 5 10	上田五郎氏、知事表彰をうける。玉田誠氏、知事感謝状をうける。
6 6	「北国の野鳥写真展」を札幌駅前の三菱信託銀行において開催。
6 18	事務所を北海道国土緑化推進委員会から、現在の北海道自然保護協会へ移転。
6 11	事務所を北海道国土緑化推進委員会から、現在の北海道自然保護協会へ移転。
6 12	昭和 54 年度の総会を北海道婦人文化会館において開催。会則の一部を改正。
55 4 19	昭和 55 年度の総会を北海道婦人文化会館において開催。会費に関する会則の一部改正。

▼昭和47年3月 探鳥会 (藤の沢, 白鳥園)



▼探鳥会での楽しい昼食のひととき (野幌)



▼昭和55年5月 三菱信託銀行ロビーにて写真展



▼昭和55年6月 旭川野鳥の会の皆さんと交流探鳥会 (大雪山勇駒別)



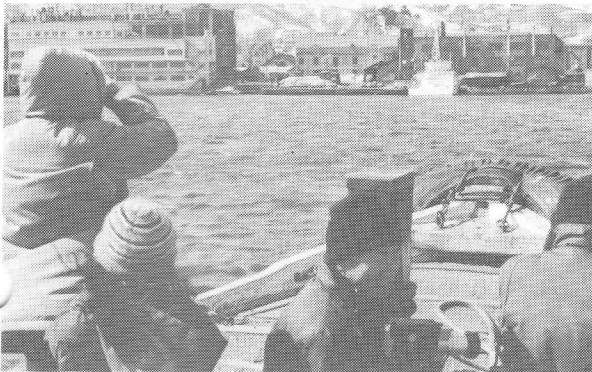
▼探鳥会 (ウトナイ湖)



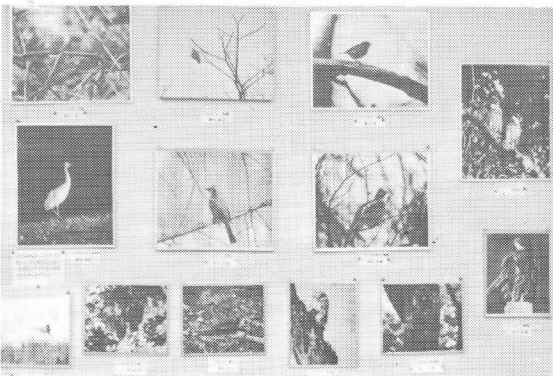
▼は〜い笑って。探鳥会での記念撮影 (大雪山)



▼恒例の小樽港探鳥会の1コマ



▼ズラリとそろった名作の数々「野鳥」写真展



年月日 | 主な出来事

- 55 4 19 個人1000円を1500円に、団体3000円を4500円に値上げ。会長に井上元則氏が就任。昭和54年度末会員数、個人382名、団体9。
- 55 5 10 佐々木勇氏、日本鳥類保護連盟総裁賞をうける。小坂忠氏、知事感謝状をうける。
- 5 12 写真展「野鳥とともに」を札幌駅前の三菱
- 5 24 信託銀行において開催。
- 6 21 旭川野鳥の会、日本野鳥の会旭川支部との
- 6 22 交流探鳥会を湧別温泉にて行う。
- 56 5 10 井上元則会長が日本鳥類保護連盟総裁賞を、会員の坂本正雄氏が同連盟会長賞を、斉藤春雄副会長は環境庁長官の地域環境保全功労表彰をうける。
- 5 11 パードウィーク野鳥写真展を三菱信託銀行
- 6 13 において開催。
- 12 - 本会のシンボルマークであるエゾフクロウのネクタイピン、タイタックを製作、販売。
- 57 4 17 昭和57年度の総会を北海道婦人文化会館において開催。
斉藤春雄副会長が野生鳥獣保護の功労により勲五等瑞宝章を受章。
- 6 - 林田恒夫氏、知事表彰をうける。
- 8 21 写真展「水辺の鳥」を三菱信託銀行におい
- 9 18 て開催。
- 10 14 幹事を北海道婦人文化会館において開催
野鳥だより第50号を記念特集号とすることについて打合わせ。
- 58 2 21 野鳥だより第50号を記念特集号として発行。

▼カンパニー！旭川野鳥の会の方々との楽しい交流会 (野幌にて)



— 提言・意見 —

記念特集号に寄せて

昭和45年に発足した北海道野鳥愛護会は精力的に広い本道の各地に熱心な愛鳥活動を続け特に野鳥だよりは全国においても高く評価されている。「北海道自然保護読本」の中にわが国に残された唯一の貴重な大自然を後世に伝えるのは本道に住む人たちの責務であると記されているのがその尊い責務を分かち合っ今日までの絶ゆまざる努力と実績を私は心から改めて敬意と祝意を表したい。今後、同好の方の熱意と協力のもとで一層向上充実発展に向けて尽したいものである。

また、今、50号記念号にあたり今日まで野鳥だよりの発行に従事された事務局全員の健闘と会員並びに同好者に敬意を表します。

今、日本には日本自然保護協会、日本鳥類保護連盟、

隅田重義

日本野鳥の会等があり独自の活動をしているが、広い本道の野鳥愛護会はその活動と将来への実績は刮目に価する。私は最近、倶知安地区小学校の野鳥調査の実態をNHKテレビ放送で見て感心した。こうした同好の方とお会いする日を楽しみにしている。また、先日富良野東大演習林に勤務されてる有沢浩さんの突然の来訪をうけた。クマゲラの研究者で有名な方、交通はしていたがお会いできたのは始めて、此の上ない喜びに。道南での発見者吉沢氏と共に赤川地区へ案内。よく観察されたがクマゲラの住むこの場所を見て私は考えを新たにしたらと語った。人となり研究の新鮮さに感じた。

野鳥だよりにお会いしたくなるような苦心談、発見談、失敗談などの親しみ深くなる研究物であるようにと、人がらと鳥から教えられるたよりを心から望みたい。
(函館市)

野鳥だよりを手にして

5年前の冬、藤の沢探鳥会に参加し、まるで子供のようなよろこびをあげました。それ以来一層野鳥だよりの楽しいつきあいははじまりました。

いま50号を迎えると聞き、あらためて綴りを出し、その重みを知るとともに鳥見に歩き出してから野鳥だよりは「自分たちの野鳥だより」という感じで以前とは見る目も変わってまいりました。

そろそろ野鳥だよりが来る頃かと待つようになり封筒を開けながら今月は、どんな鳥が表紙を飾っているかしらと楽しみにうっとり眺め、図鑑の解説とつきあわせたりして、双眼鏡で見るのとはまたちがった思いがいたします。

探鳥地案内は遠隔地でも、いつの日か訪れる機会を持

谷口登志

ちたいと期待して拝見しております。

探鳥会報告はとても身近なもので、皆さんその日の様子を手にとるように上手に書いてありあれこれ想い出し、不参加のときにかぎって意地悪く、通常なかなかお目にかかれぬ鳥がのっていることがあり、残念やるせない思いがします。

探鳥案内日は早速カレンダーに「探」と印を入れて次回を楽しみにしています。

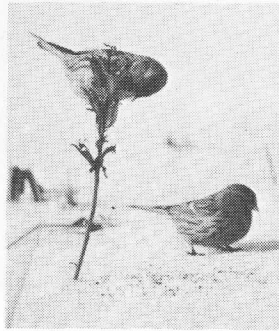
いつも投稿して下さる皆様、そして編集して下さる方々のお骨折りを感謝し、失礼いたします。

(札幌市)

今考えていること

今も鮮やかに覚えている色がある。古いフィールドノートによると、昭和52年の4月26日。札幌北郊のベケレット沼、春とは思えない、冷たい北風の吹く日だった。私はこの日クロジとカワセミ、この対照的な色あいの鳥を初めて見た。

それからわずか5年、バードウォッチングはブームになり、日本野鳥の会の会員も倍以上になった。東京では、ささやかな緑陰に集まる鳥を求めて、人々も集



森拓人

まる。百人を超す探鳥会はもう当たり前になった。コバルトブルーのカワセミは、その色あいの魅力でバードウォッチャーをひきつけ、今や野鳥の会のシンボル、マスコットバードとなった。そのせいか、カワセミの見られる探鳥会はことのほか人気があり、人が殺到するという。

でも、今、私は「カワセミ人気」を素直に喜べない気分だ。というより、このままブームが続いて、ささやかな自然もバード

ウオッチャーが溢れ、商業主義の色がますます濃くなっていったら……と、なぜかちょっと不安になるのだ。

あの日、私はカワセミの美しさに感激した。やっと会えたとも思った。この気持ちに今も偽りはない。バードウォッチングを世に広めるため大車輪で頑張ったことも素晴らしいと思う。バードウォッチャーだって、よその国と比べるとまだまだ少ないのだから、もっと増えてもいい。しかし、このあたりで一度立ちどまって足もとを見つめてもよいのではないかと思う。あまりにも「産めよ増やせよ」1本やりで来たような気がするのだ。

私は今、あえて言いたい。クロジでいこうと。美貌でもチャーミングでもないから、爆発の人気を呼ぶことはないかもしれないけれど、渋くて複雑な色あいがまた別な魅力だ。クロジに魅せられた人たちの会。派手ではないけれども、地道で地に足がついた取り組みで、自然保護に確実に実績を築いていくような気がするのだが……

生来のへそまがりのせいかな、それとも私が年をとったせいなのかしらん？
(千葉県 柏市)

50号記念によせて

「愛護会に何か提言を……」と原稿用紙を渡されましたが、探鳥会にも時折思い出したようにポツンと参加している程度の私としては、あまりの課題に思案投げ首です。大仰に構えても名案の出るはずもなく、思いつくままに書き進めてみることにしました。

「探鳥会」というものを知ったのは6年程前の春のことでした。新聞紙上に週末の案内として載っていたのです。都会の雑踏の中で暮らしている私には、心ひかれるものがあって野幌へ出かけました。おぼつかぬ目で探し、ようやく双眼鏡の中にキビタキの姿を見出した時、久しく忘れていた感動に捉えられました。子供の頃、童謡で歌い、童話で夢みていた赤い鳥も青い鳥も実在していたことに歓び自然の美しさに魅了されました。自然が身の回りになかったのではなく、自然を見ようとはしなかった事を再認識させられました。おそらく、これに似た感動をどなたもおもちなのではないかと思うのです。



紅林幸子

やがて、「識るは楽しみなり」という言葉通り、少しでも詳しく知りたい、彼等の行動を情緒的にはなく、科学的に捉えたいと思うようになります。そんな時、会の方達からの当意即妙なアドバイス、レクチャーを得ると、探鳥の楽しみは更に深まります。ただ、質問したい、新しい何かを知りたいと思いつつ、気遅れを感じてしまうのは私だけなのでしょうか。もっとも、私の場合、学習不足が最大の原因と思うのですが……。

自然破壊の危機が叫ばれている今、野鳥を含めて、自然を守っていく事は、今を生きる人々の使命だと思います。誰かがするのはなく、それは、1人1人の認識の上に成り立っていると思います。自然の偉大さを、尊さを再認識して

いくために底辺の拡大は不可欠です。愛護会は、そうした意味でも社会へ大きな影響力を持っており、今の発展を願わずにはられません。

鳥の名がわからなくても、声を聞き分けられなくても同じ大地の恵みを受けて生きる者同士として、終生彼等と友でありたい。そして、次の世代へ受け渡したい、そう思います。
(札幌市)

50号の重みから

「野鳥だより」のファイルをハカリに乗せてみたら、驚きかな19kgにもなった。創刊号から49号までの束である。この重さは素晴らしい重さである。会員みんなの財産の重さである。その一頁一頁に、その一字一字に貴重な記録性があり、忘れられない思い出がある。そして、代々編集に苦勞された人々のお顔が見えてく

小山政弘

るような気持さえる。

当初、私は「愛護」という名称がどうしても好きになれなかった。自然環境保護を真剣に考えていた頃だったので、「好き者の集り」というイメージに馴染みなかったのだ。昨今、それはどうでもよくなった。というのも、「野鳥だより」の文献性が、それなりに汎く市民権を持つ

ようになったからだ。正に継続は力である。そして、いつまでも「野鳥だより」は続けて行きたいものである。

一つ問題と考えることは、“北海道”の冠がどれだけ生かされているかという点。いつぞや、私は地域割頁の編集方式を提案したことがあった。はたして、その効果もやってみなければ肯とも否とも出ないが、ともかく50号を迎える「野鳥だより」、何かユニークな試行が織り込まれてよい時期かとも思われる。

加えて機関誌以外の事業にも具体的展望がほしい。例えば全道の会員の手にかかる鳥の民俗的調査（方言・いい伝え・利用法……etc.）、難識別種についての

集中情報、収集分析（コガラとハシブトガラなど）、野鳥観察珍談集の出版、北海道野鳥写真、スケッチ集の出版……等々、考えれば何かありそうである。

ともかく、ゴールがはっきり見えなければ多くの会員の協力は得られない。具体的展望がどうしても出なければ、まず例の「チェックリスト」を今一歩平易な型式にかえ、ハガキ式に刷り直してみてもどうか。

けれど、50号の重みからはきっと新しい何かが生まれる筈である。（大成町）

愛護会に期待します

長岡宏幸

私が入会させていただいたのは、昨年秋でまだ一年しかたっておりません。それなのにずいぶん長くおつきあいさせていただいているように感じます。それは、お世話下さっている幹事さんたちの魅力によるところが大きいこと、また会員の方々が素晴らしいからだと思います。私も野鳥の魅力にとりつかれており、ただただ鳥たちに会いたくて、休日をその楽しみにあてていますが、愛護会主催の探鳥会にはできるだけ参加させていただいているわけです。

鳥見にもいろいろスタイルがあるようでして、いくら鳴いていても姿を見なくちゃ満足できない「姿派」、一声聞いただけでも顔が輝く「声派」、「なんだまた〇〇か」と新しい種を見たがる「珍鳥期待派」、咲く花、樹、昆虫、何でも興味を示す「総合自然観察派」、等々、私はどう分類されるかという、何を見ても喜ぶ、「単純

派」でもなりましようか

それはさておいても、鳥が好きで見ているうちに、喰べる虫や木の実、草の実にも関心を持つようになるのは自然な事と思います。そんな期待に応えられる探鳥会に発展させていただきたいと思います。植物に詳しい人、昆虫に詳しい人に同行していただき助言してもらおうなどはいかがでしょうか。

また、会員の親しさを増すための方策をと思います。参加者の数にもよりましようが、自己紹介をしあう、幹事さんの一言スピーチを皆で聞くなど昼食時を利用した一体感を味わえる運営がされると良いと思います。

幹事さんたちの御苦労も知らず勝手なことばかりですがお許し下さい。「北海道野鳥愛護会」が文字通り、センターとして、他の野鳥の会や自然保護団体などと協力して北海道の鳥たちの強い味方として発展されることを期待しております。（岩見沢市）



北海道野鳥だより

総目録

(第1号～第49号)

表紙

タンチョウ	編集部	1	チゴハヤブサ	山本 一	39
オオハクチョウ	近藤 映二	2	コヨシキリ	小堀 煌治	40
探鳥会風景(ウトナイ湖)	編集部	3	コキアソウシギ	萩 千賀	41
ヒシクイ	野村 梧郎	4	ハチジョウツグミ	山田 良造	42
コウライキジ	萩 千賀	5	コミミズク	平井さち子	43
ビンズイ	渡辺 俊夫	6	ノビタキ	猪口 卓	44
フクロウ	船造 淳一	7	ヨタカ	村野 紀雄	45
アカエリヒレアシシギ	百武 充	8	アカゲラ	斉藤 正彦	46
ツマフクロウ	野村 梧郎	9	コクガン	長尾 康	47
アカモズ	柳沢 紀夫	10	ヤマセミ	梅本 正照	48
イソシギ	柳沢 紀夫	11	コモンシギ	梅木 賢俊	49
キレンジャク	新宮 康生	12	探鳥地案内		号
ギンザンマシコ	小堀 煌治	13	石狩川河口	羽田 恭子	29
ホオジロガモ	萩 千賀	14	鶴川河口	梅木 賢俊	29
アジサン	萩 千賀	15	新得山	藤巻 裕蔵	33
キレンジャク	入江 義智	16	函館山	森口 和明	34
エゾライチョウ	小堀 煌治	17	北村の鏡沼	白沢 昌彦	35
トウネン	入江 智一	18	帯広農業高校	藤巻 裕蔵	36
アオアソウシギ	野村 梧郎	19・20	千歳川	平井さち子	37
セイタカシギ	萩 千賀	21	稚内市森林公園	先名 征司	38
ウミネコ	入江 義智	22	藤の沢小鳥の村	小堀 煌治	39
クマガラ	梅木 賢俊	23	嵐山北邦野草園	山田 良造	40
オオジシギ	野村 梧郎	24	冬の小樽港	中野 高明	41
冬の大沼公園	梅木 賢俊	25	津軽海峡のコクガン	森口 和明	42
シロフクロウ	萩 千賀	26	湧洞沼	平沼 裕	43
アトリ	森 拓人	27	大麻中央公園	村野 紀雄	44
ユリカモメ	小堀 煌治	28	恵庭公園	竹田 義明	45
タンギ	小山 政弘	29	福 移	羽田 恭子	46
ソデグロヅル	梅木 賢俊	30	浜頓別周辺	岸 則男	47
オグロシギ	小山 政弘	31	羊蹄山麓周辺	和田 淳	48
キジバト	先名 征司	32	西岡水源池	山田 三夫	49
ロウパンガン	萩 千賀	33	各地の野鳥		号
コオリガモ	猪口 卓	34	根室の野鳥	岡 清松	2
オナガガモ	長井 博	35	江差の野鳥	小森 利夫	8
フクロウ	村野 紀雄	36	増毛の樹園地にみる冬の鳥	高橋 明雄	10
キビタキ	薄井 五郎	37	冬の大沼公園の鳥たち	森口 和明	14
カナダヅル	萩 千賀	38	冬季に増毛地方でみられる鳥	高橋 明雄	16
			響灘埋立地の野鳥たち	武井 修一	19

サロベツの身近な鳥たち	富士元寿彦	23	カルガモの潜水採餌行動を観察して		
日高の鳥	佐藤 辰夫	24		森口 和明	8
羊ヶ丘の鳥	四十万谷吉郎	24	ムクドリを観察	沢田 智明	8
川湯周辺の鳥	百武 充	26	ヒヨドリの曲芸	小堀 煌治	9
円山周辺の鳥	羽田 恭子	27	野鳥の日記	さとう 実	9
鷹栖町の野鳥	田嶋 邦生	28	コヨシキリを見て	小泉 三雄	9
尾岱沼原野の野鳥	三浦 二郎	29	キレンジャク	新宮 康生	10・14
北見市の野鳥	鷲田 善幸	30	瀧沸湖のハクガン	玉田 誠	11
羅臼の野鳥	広野 孝男	31	コヨシキリ	小堀 煌治	11
旭川のワシタカ類(上)	山田 良造	31	トラフズクの一営巣例	入江 義智	11
旭川のワシタカ類(下)	山田 良造	32	シロチドリ繁殖を観察して	萩 千賀	11
千歳・恵庭地方の鳥類	金山 哲夫・小山 政弘	32	鳥の記録(初認・終認)	編集部	11・15・18 21・26・28
旭川周辺の野鳥	山田 良造	33	稚内でコシアカツバメ繁殖	百武 充	12
鶴川におけるシギ・チドリ類の分布状況			イスカの来訪	新宮 康生	13
	小林 清勇	34	3羽の越冬隊員	宮崎 政寛	14
瀧沸湖周辺の野鳥	城殿 博	35	野鳥の日記から	さとう 実	15・16
釧路市・春採湖の野鳥	橋本 正雄	36	美咲市でコブハクチョウ	藤巻 裕蔵	15
真駒内保健保安林及びその周辺の野鳥について			天売島海鳥観察記	小山 政弘・入江 義智	16・19
	新妻 博	37	名寄市のムクドリのおぐら	山崎 治行	17
糠平を中心とする東大雪の鳥	川辺 百樹	38	白鳥の偵察飛行について	玉田 誠	18
新得山とその周辺の野鳥	藤巻 裕蔵	39	千歳のオジロワシ	金山 哲夫	18
野幌森林公園の鳥	柳沢 信雄	40	畑地のオオハクチョウ	小山 政弘	18
ウトナイ湖とその周辺の鳥類	佐藤 辰夫	41	奇形のハクチョウとの再会	玉田 誠	19・20
道東一帯で行われたオジロワシ・オオワシの一斉調査について	中川 元	42	鶴川河口にハイイロガンらしいガンがいます		20
門別町の野鳥	鷲田 善幸	43		佐藤 辰夫	19・20
二風谷の鳥類	長井 博	45	昭和49年春の鶴川河口での観察記録		
石狩川河口の鳥	島田 明英	46		羽田 恭子	19・20
羽幌町周辺の野鳥	小山 哲生	47	チゴハヤブサの観察	入江 智一	19・20
観察記録			鳥獣保護員観察から	編集部	20
カナダヅル	正富 宏之	2	セイタカシギ	萩 千賀	21
野幌のアオサギ発見記	井上 元則	3	野付の夏鴨	三浦 二郎	22
光珠内のバン	村野 紀雄	3	昭和50年秋の鶴川河口観察記録	小林・萩・羽田	22
原生花園にアマサギ	大西 重利	3	真夏の知床にヤツガシラ	広野 孝男	22
校庭にクマガラ	大垣内四郎	3	白キジ	平井百合子	22
白いフクロウ	佐藤 実	3	道東野鳥観察記	野村 梧郎	23
石狩河口のシギ	萩 千賀	4	アオシギ	羽田 恭子	23
瀧沸湖に残留した白鳥	玉田 誠	4	カワセミの観察	榊原・佐藤・高橋	25
白鳥六態	玉田 誠	5	コクガン	隅田 重義	25
原生花園のマガン	大西 重利	5	本州の野鳥たち	入江 智一	25
白鳥の助走についての調査	玉田 誠	6	コウノトリ	隅田・吉沢	26
トーフツ湖のクロヅル	玉田 誠	6	冬を越すモズ	柳沢 信雄	26
クロヅルの便り	大西 重利	6	生花苗沼	小野登志和	27
コムクドリを観察	高橋 明雄	7	1976年冬の鳥・福岡	武井 修一	28
夏鳥のはつだより	編集部	7	函館のクマガラ	吉沢 貞一	28
厚沢部のハクチョウ	脇田勝之進	7	日高山脈のハギマシコとギンザンマシコ		
エゾアカゲラ	小堀 煌治	8		戸田 敦文・吉田 真二	32
			オオジュリンのアルビノについて	三浦 二郎	32

美唄でメジロの巣を確認		
中田 圭亮・東浦 康友・菊沢喜八郎	32	
コクガンの飛来と霧多布湿原の水鳥たち		
諏訪 良夫	33	
美唄でハチジョウツグミを確認	中田 圭亮	33
もどってきた首環白鳥とユキホオシロ		
三浦 二郎	33	
雁の大群観察(サロベツ)	佐賀 耕一	33
網走地方の鳥2題	林 倫子・林 秀明	33
アメリカコガモの記録	野村 梧郎	34
保護されたセグロアジサシ	長尾 康	34
トンボをとらえたハクセキレイ	伊藤 正清	34
オオモズがいました	鈴木 梯司	34
1978年夏鳥の初認記録	新妻 博	34
道東の鳥のノートから	百武 充	35
ひなを呑むへび	藤林 忠雄	35
標識をつけたオオハクチョウ	長尾 康	35
後志・松山地方の鳥相	小川 巖	35
ハイロガンの発見	藤原 直人	36
ノドグロツグミの確認状況	木内 栄	36
天売鳥のアカゲラと天売・焼尻の鳥類観察記録		
鈴木 梯司	36	
えりものチンマンギ	佐藤 辰夫	37
札幌市内でチゴハヤブサが営巣	編集部	37
鷗川でオオチドリを観察	羽田 恭子	38
マナヅル発見	大西 重利	38
阿寒湖畔のオジロワシ・クマガラ	山田 清二	38
カナダヅルを確認	羽田 恭子	38
函館湾のコクガン	長尾 康	38
チゴハヤブサの観察記録	山本 一	39
シベリアオオハシツギ	羽田 恭子	40
イスカの求愛給餌	北尾 諭	41
コキアツツギの観察	羽田 恭子	41
イカルチドリの繁殖記録	小野登志和	43
奥尻島探鳥記	小山 政弘・小山 弘昭	45
朝里川のアジサシ	山田 清二	46
6年目を迎えた大沼のコブハクチョウ		
隅田 重義・吉沢 貞一	47	
カラヒワのふるさと	新妻 博	48
鳥学		号
ヒヨドリとエゾヒヨドリ	百武 充	3
セキレイのこと	川辺 百樹	32
コウミスズメの救助と自然復帰の方法		
風間 辰夫	34	
果実を食べる鳥と多肉果をつける樹木との関係		
斉藤新一郎	35	
<抄訳> ドングリゲラと貯蔵木	斉藤新一郎	36
<抄訳> 立枯れ木の除去と鳥の反応		
斉藤新一郎	37	

緑と野鳥	藤巻 裕蔵	48・49
窓		号
バードウイーク・公園のコウライキジ・		
狩猟と密猟者・保護收容	編集部	2
鳥獣保護区・鳥獣保護及狩猟に関する法律・		
狩猟鳥獣・鳥獣審議会	編集部	3
自然を返せ	編集部	4
追われゆく野鳥類	編集部	5
緑の自然で野鳥に親しむ	編集部	6
環境庁の発足と狩猟規制の強化	編集部	7
東と北と・自然保護三題	編集部	8
自然保護への輪を広めよう	編集部	9
日米間で鳥類保護条約	編集部	10
自然保護を考える	編集部	11
タンチョウの保護問題に思う	編集部	12
ガンにとってのウトナイ湖の重み	編集部	13
活動を始めた観測ステーション	編集部	15
野鳥の森と野鳥公園	編集部	16
珍鳥の記録と鴨猟場	編集部	18
鳥獣保護及狩猟に関する法律施行規則の一部		
改正について	編集部	21
随想・主張		号
私の給餌台「雀」	苜野寿衛吉	1
給餌台の早春	小沢 広記	1
趣味から保護活動へ	百武 充	1
ヨーロッパの野鳥保護	井上 元則	1
野鳥雑唱	平井さち子	1
野鳥保護雑感	斉藤 春雄	1
鳥の会誕生	藤巻 裕蔵	1
アパートに住んでいても	衛藤たみ子	2
私が救った野鳥のこと	脇田勝之進	2
わが国の自然保護対策を考える	小山 政弘	2
私の給餌台	加藤 郁夫	2
カッコウ	平林 道夫	2
私とアオサギ	西川半次郎	2
庭のコウライキジ	沖田 兵蔵	2
道南のオジロワシとオオワシ	佐藤 昌蔵	2
ウソによる桜の被害と駆除	隅田 重義	2
鷺の森吟行	工藤 紫蘇	2
野鳥愛護教育	高橋 淳根	2
旅と野鳥と	野村 梧郎	2
身辺野鳥雑記	竹越 俊文	3
わが家のシジュウカラ	土屋 文男	3
巣箱は樹幹に放置しないこと	北口 盛	3
シラルトロ湖の白鳥	衛藤たみ子	3
野鳥愛護の輪を広げよう	柳沢 信雄	3
野幌森林公園のカケス	井上 元則	4
砂崎灯台の渡り鳥	隅田 重義	4

身近かな小鳥	土屋 文男	4	北大植物園	山田 清二	19・20
心ないハンターに怒り	梅木 賢俊	4	西野のキジバト	野村 梧郎	21
風蓮湖の狩猟禁止を	風蓮湖愛鳥保護協会	4	事務局の「曲り角」を読んで	玉田 誠	21
キツツキ	荻野寿衛吉	5	鳥の紳士録ーユキホオジロ・シノリガモ・ハシブトガラ・		
函館山の野鳥	隅田 重義	5	コゲラー	百武 充	22~24・27
札幌のキツツキ	土屋 文男	5	樺太博物館の思い出	佐々木 勇	22
連 雀	井上 元則	5	うちのお客さん	さとう 実	23
愛鳥活動と児童	大垣内四郎	5	給餌台の仲間たち	新宮 康生	23
ミスター・キューイ	野村 梧郎	6	さらば勇弘湖沼群	小山 政弘	23
野鳥雑感	羽田 恭子	6	クマガラの住める森に	柳沢 信雄	23
探鳥会のノートから	百武千恵子	6	森林施業のあらまし	松田 忠雄	24
給餌台と野鳥たち	吉村健次郎	6	オオルリ1羽2万円	編 集 部	24
オオハクチョウ雑感	三品忠太郎	6	オロロン鳥	佐々木 勇	26
カラス	定 茂	6	コウノトリ	野村 梧郎	27~29
野鳥と共に	船造 淳一	7	さらば野幌自然休養林	クマガラ熊太郎	27
旭川の野鳥愛護活動	畠山 周治	7	帯広畜産大学自然探査会鳥類研究グループの		
ヨーロッパの鳥たち	土屋 文男	8	活動紹介	戸田 敦夫	28
無法ハンターをにくむ	三品忠太郎	8	鳥を観る時のスタイル	飯山五玖子	33
ナイチンゲールを聞く	土屋 文男	8	北海道探鳥の印象	田沢 道広	34
鳥 語 (1)~(5)	三浦 五郎	9~11 13・17	中国見聞報告	長井 博	35
根室で考えたこと	山本 永人	9	えぞ鳥獣夜話	安田 鎮雄	36~38
片野の鴨池	四十万谷吉郎	9	ウトナイ裏話	小山 政弘	39
追われゆく水鳥たち	宮崎 政寛	10	ビルの谷間の小鳥の村	木内 栄	42
鳥の旅	藤巻 裕蔵	10	裏庭の小鳥	荻野寿衛吉	42
道南のオジロワンなど	山田 佑平	10	やぶにらみ野鳥撮影論	小山 政弘	42・43
餌付け	平沢 清一	10	わが家をめぐる鳥	高田 勝	43
屠殺場の野鳥	入江 義智	10	藤の沢のオンドリ	野村 梧郎	46
鳥のノート(1)~(5)	土屋 文男	11~14・21	北ぐにの鳥 うらばなし	斎藤 春雄	46
鳥のこえ人のこころ	勝 玄夫	11	野鳥の生活、行動についての児童書のリスト		
ヤマセミの観察	入江 智一	12~14		早瀬 広司	46
哀れだったイワツバメ	山田 良造	12	校庭の鳥をみながら	高橋 明雄	49
思い出の野鳥	門崎 和子	12	お知らせ・呼びかけ・報告・その他		号
「風蓮湖を守る会」の発足にあたって			野鳥は人類の文化財	犬飼 哲夫	1
	三浦 二郎	13	愛鳥モデル校の歩み	岩見沢市立孫別小	4
給餌の誘い	中畑 勉	13	道東の野鳥保護に50年「岡さんに勲六等瑞宝章」		4
野鳥保護閑話	小山 政弘	13	ヒバリはいつ帰ってくるでしょうか		
カッコウの減少と生態系の破壊	井上 元則	14		百武 充	5
餌台の野鳥	入江 義智	14	白鳥で結ぶ友情	編 集 部	5
野鳥のまち作り	川村 芳次	14・18	野鳥の観察記録をつけよう	藤巻 裕蔵	5・6
早春賦	高橋 明雄	14	巣箱の話	編 集 部	5
伐り倒された朽木	小山 政弘	15	野鳥保護で知事表彰	編 集 部	6
トビ哀れ、ウトウ悲し	高橋 明雄	15	全国野鳥保護のつどいに出席して井上 元則		7
カラス	平林 道夫	15	鳥のはん・保護の本	編集部	8・9・11~14・16・17
野鳥のきびしさ	佐藤清左衛門	15	クマガラの記録求めます	松岡 茂	11
野鳥雑記	新妻 博	16	歩く道具	藤巻 裕蔵	12
コオリガモとウミアイサ	成田 良三	17	ブラインドの作り方、使い方	小川 巖	12
ホンガラスと高山林業の関係について			この白鳥を探して下さい	玉田 誠	12
	井上 元則	19・20	札幌周辺の鳥類相調査の呼びかけ	小川 巖	13

自分のフィールドを持ちましよう	柳沢 紀夫	14	カワセミの写真展をみて	谷口 一芳	35
足環のついた野鳥はいませんか	正富 宏之	15	多摩から	森 拓人	35
「日本白鳥の会」の設立総会に出席して			青い鳥よこい	伊藤 正清	35
	玉田 誠	15	バードテーブルを作らましよう	編集部	39
双眼鏡の雨よけについて	松岡 茂	11	松前町と野鳥	熊谷 芳明	43
札幌周辺の鳥を記録する会(仮称)の活動報告と参加の呼びかけ	小川 巖	17	チェックリストその後	小川 巖	43
野鳥に関する意識調査	小山 政弘	17	北海道野鳥分布図を作らう	藤巻 裕蔵	44
旭川野鳥の会だより	山田 良造	17	チェックリスト体制の建て直しを目指して		
渡り鳥条約とはどんなものか	編集部	17		小川 巖	44
叙勲にあたって	井上 元則	21	チェックリストのこれまでとこれから		
北海道のモズ類	小川 巖	22		小川 巖	45
第二次調査探鳥会の試み	小川 巖	23	ウトナイ湖サンクチュアリから	安西 英明	46
鳥の食物を調べよう	藤巻 裕蔵	26	ネイチャーセンターからの便り	安西 英明	48
山階芳磨博士とデラクール賞	井上 元則	30	野幌交流探鳥会報告	柳沢 信雄	49
第1回野鳥調査のまとめ	編集部	30	総会報告	1・21・24・28・32・36・40・48	
野鳥分布調査の実施にあたって	編集部	31	新年懇談会報告	26・35・39・43・47	
首環をつけたガンをさがして下さい	編集部	34	鳥民だより	26~49	

これからのチェックリスト

小川 巖

「野鳥だより」50号記念に、チェックリストの総括をせよ、というのが編集委員会の意向。本当ならチェックリストをもとにした種類別全道マップで、誌面を華々しく飾ってしかるべきなのに、出てくるのは相変わらず弁明ばかり。この点は、チェックリストに長く携わってきた一人として、特にリストを忘れずに送り届けてくれる会員に深くお詫びしなければなるまい。

しかし、頭がよく冷えている今思い返してみると、そもそもチェックリストなどつける習慣などない事実をすっかり忘れて、ずいぶん伸びたプランを立てたものをつくづく思う。それにバードウォッチングを個人レベルの楽しみと心得ている限り、鳥情報の「共有化」など叶わないことも。これから先は、フーテンの寅さんの言ではないが、地道にチェックリストの定着化に努める方が先決というものだろう。それには、探鳥会などの行事を開くたびに、参加者全員にチェックリストを配って書

き込んでもらうとか、「野鳥だより」の発送時に同封するなどは、ぜひ実行したいもの。

それに、北海道全域を対象とするのは、広すぎやしないか。すでに環境庁委託によって日本野鳥の会が昭和53年に行なった分布調査があるとなれば、なおさらというもの(すでに報告書としてまとめられている)。当座は、もっと限られた地域で実施してみてもどうかと思っている。一拠点における成果とそのノウハウは、次の拠点での参考として、きっと生かされるに相違ないからだ。こう書くといかにも責任逃れの弁に聞こえるかも知れないが、これが約10年間、本会を介してチェックリストに関ってきた者の偽わざる感想である。

最後にもう一度繰り返すと、野鳥の分布地図作成のためのチェックリストというよりは、野鳥記録の手法、もっとはっきり言えば習慣化の問題と思うようになった。100号記念号には、何と報告できるのだろうか。



鷓 川

57. 8. 29

長岡 滋雄(中1)

今日は朝からうすぐら
くて、いやな天気だった。
朝7時「岩見沢野鳥の会」
の人たちと合流し鷓川駅
へ。鷓川の方がましかな。
と思ったが大ハズレ、風

がつかなくてかさを持ってきた人がかさをひらいたら、とばされそうになった。

鳥を見始めたが風が強くプロミナーをのそくとぐらぐらゆれて見づらいし、いちいちキャップをつけないと水てきがついて見えなくなる。そんな条件にもめげずにムナグロが30羽ぐらいチョコチョコ歩きまわっているのを

見て、「小さいのはいいなあ、あまり風にあたらなくて」と一人ごと。ハマシギもすぐ目の前でチョコチョコ歩き、ほそ長く少し曲ったくちばしをしきりに砂の中にさしてエサをとっていて、とってもかわいかった。

そして一番よかったのはオグロシギ、大きくて、かっこ良かったが昨年きたときに見たトウネンを見れなかったのがざんねんだった。来月も鶴川だそうなので、きたいしようと思う。

(記録された鳥) アオサギ、カルガモ、コガモ、トビ、コチドリ、ムナグロ、ダイゼン、トウネン、ヒバリシギ、ハマシギ、タカブシギ、オグロシギ、オオセグロカモメ、

武 川

57. 9. 19

武 沢 和 義

ここしばらく、宮沢賢治の詩と童話を読んでいます。彼は大正12年の夏に北海道から樺太を旅行しております。旅の目的は、その前年に亡くなった妹の鎮魂のためで、この時に書いた「オホソク挽歌」群の詩は、北方の自然を背景に妹への思慕の心をうたいあげて賢治の作品の傑作に数えられています。この中で、賢治は妹の姿を海鳥に託して生前の妹を追想しました。波打ちわに遊ぶイソシギです。宮沢賢治に限らず、昔からシギやチドリは過去をふりかえったり、肉親への愛情を表現するのによく使われてきました。おそらく、鳴き声がそのような思いにふけるのにふさわしいのでしょう。残念ながら、私はシギもチドリも鳴き声を知りません。一度聞きたいものと思っております。

9月19日の探鳥会は鶴川河口の干潟でシギやチドリを観るとの事だったので、喜びいさんで参加しました。幹事の方の話では、鳥よりも人の方が多きさびしい探鳥会だったそうです。その事に気がつかったのかどうかわかりませんが、1羽のツルシギが始めから終わりまで、びっしりとつきあってくれました。後半には観察場にやってきて、カメラの前でしきりにポーズをとるというサービスぶりです。ムナグロやトウネンも比較的近くであまり動かずにいてくれました。おかげでゆっくりと観察することができました。

昼食前に一度、観察場から少しはなれて川の上の方へ移動してみました。川岸の砂地を2羽のハマシギが歩いていました。この時、10羽前後の鳥が後から飛んできて、川の浅瀬に降りました。比較的大型のシギでクチバンが上にそっています。それを水中に入れたまま、右に左に

ウミネコ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、スズメ、ムクドリ、ハンボソガラス(22種)
(参加者) 清水幸・朋子、関口健一、吉田省三、鷺田善幸、道川 弘・富美子、横田通典、横山和成、坂本真由美、絵内厚子、若林信男、長岡宏幸・滋雄・ゆりこ、山下 肇、小林隆志、山田タカシ、来本正、杉本直之、早瀬広司、長谷川涼子、岩泉ゆう子、萩 千賀、紅林雅文、大坊幸七、霜村耕介・耕一、浅沼佳代子、柳沢信雄・千代子、天童雅俊、鈴木茂也、渡辺紀久雄、羽田恭子(35名)

(担当幹事) 渡辺紀久雄、羽田恭子

☎ 068 岩見沢市6条東13

忙しく動きまわります。これをやるためにクチバンがそっているのかなと思いつつ、そのユーモラスな歩きっぷりをしばらくながめていました。やがて何羽かが鳴きました。鳴き声はどのように書いてよいかわからないが、清涼な高い声でビョー、ビョーと一声づつ区別しながら鳴いたようです。長くは続きません。せいぜい3声か4声です。夜中にこの声を聞くとさびしげな感じがするだろうなと思いました。もう少し聞きたかったのですが、群れ飛んでいってしまいました。飛び立つ時の尾の白さがきらりと光って、とても印象的でした。後で教わったのですが、これはアオアシシギでありました。

(記録された鳥) アオサギ、カルガモ、コガモ、トビ、チュウヒ、キジ、ムナグロ、トウネン、ヒバリシギ、ハマシギ、サルハマシギ、キリアイ、ツルシギ、アオアシシギ、タンシギ、ウミネコ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、ムクドリ、ハンボソガラス(25種)

(参加者) 高橋利道、新宮康生、西川喜久世、曾根モト、福井スエ、萩 千賀、早瀬広司、天童雅俊、住友順子、青木二郎、佐藤辰夫、菅原矩子、栃本文子、岩泉ゆう子、柳沢信雄・千代子、浪田良三、谷口一芳・登志、日向利男、村上一夫、加藤喜七、梅木賢俊、長尾 繁、渡部 幸、鷺田善幸、澤井義人・夏子・陽子、中村英造・久美子、山内和博・西子・港・樹、清水 幸・朋子・克幸、武沢和義・佐知子、紅林雅文・幸子、道川 弘・富美子、羽田恭子(45名)

(担当幹事) 萩 千賀、羽田恭子

☎ 064 札幌市中央区南4条西26丁目

野 幌

57. 10. 24

田 村 和 枝

新聞で野鳥を見る会があるのを知り、さっそく友人から双眼鏡を借りて息子(6才)と二人で参加しました。

日頃は、春には山菜とりや、夏は山登り、ハイキング

etc. 自然に親しむ事の好きな私達ですが、バードウォッチングは初めてです。どんな鳥がこの双眼鏡に写るんだろうとわくわくした気持ちで、皆さんのあとについて出

発しました。最初に見た鳥はカワラヒワです。どこかで聞いたことのある名前だな。あっそうそう子供に読んでやった本の中にあっただけ。「カワラヒワは、住宅地でよくみられる鳥です。……」落葉がヒラヒラと舞い降りる中を更に進んでいくとエゾリスがいました。道路沿いの木の細枝をとりまわっています。こんなに近くに見たのは初めて。可愛くてしばらく見入っていました。皆さんは、野鳥愛護会の会員でベテランらしく、遠くの鳥でもすぐに見分けられるようですが、私達は、そのあとを追いかけて、追いついた時には、もう飛び去ってしまったというくやしい事もしばしばでした。

最後に、今日出会った鳥の確認がありましたが、全部で28種類もいたなんてとても信じられませんでした。次回からは少し勉強して参加したいと考えています。

(記録された鳥)トビ、ノスリ、アオバト、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ルビビタキ、ツグミ、キ

タイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カシラダカ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、イカル、シメ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、タカS.P (28種)

(参加者) 田村和枝・剛、道川弘・富美子、清水朋子、高野京子、工藤敏人・哲史、品田延一、二上篤、柳沢信雄・千代子、戸津高保・以知子、藤原弘子、水崎満、天童雅俊、福井スエ、田中静紅、長岡滋雄・範子・ゆりこ・宏幸、岩泉ゆり子、羽田恭子、遠藤明美・みずぎ、武沢和義・佐知子、渡部幸、池田、長谷川涼子、北尾論、二本木セツ、山田真己子、渡辺紀久雄、横田通典、五十嵐優幸、関口健一、高橋承造、早瀬広司、青木二郎、栃本文子、大坊幸七、東海林邦彦 (45名)

(担当幹事) 柳沢千代子、早瀬広司

〒061 札幌市西区手稲前田717 ホクレン公宅 B-106

厳寒期ですので防寒には十分に御注意下さい。3月はスキー探鳥会と出発間際の水鳥達、4月は渡って来始めの夏鳥です。

〈野幌森林公園〉昭和58年3月13日(日)

午前9時 国鉄大麻駅待合室 歩行に適したスキーが要ります。

〈ウトナイ湖〉昭和58年3月27日(日)

午前10時30分 ウトナイ遊園地 水鳥の他にオオワシ、オジロワシなどが見られます。

〈野幌森林公園〉昭和58年4月24日(日)・5月8日(日)午前9時30分 大沢口(中央口)入口

〈野幌森林公園を歩きましょう〉昭和58年4月17日(日)・5月22日(日)午前9時30分 大沢口(中央口)入口



なお、「野幌森林公園」「野幌森林公園を歩きましょう」の各探鳥会に初めて参加の方は当日の午前8時30分、100年記念塔前に集合して下さい。

いずれの探鳥会も、ひどい暴風雪でない限り行います。

昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。

いずれも午後2時頃には終わります。

探鳥会のお問い合わせは、北尾(011)611-6455へ

恒例の2月の第3日曜日の野幌スキー探鳥会は都合により3月13日(日)に変更いたしました。

鳥民便り

★懇談会の御案内★

遅くなりましたが、例年通り懇談会を次のとおり行いますので、お誘い合わせのうえ、多数ご参加下さい。

- ◆とき 昭和58年3月12日(土) 13:30~16:30
- ◆ところ 北海道婦人文化会館 (札幌市中央区北1条西7丁目、電話251-6329)
- ◆内容 会員の写真やスライド発表、観察報告、懇話などを予定しております。

〈原稿をお寄せ下さい〉

編集部では、探鳥地案内、各地の野鳥等の原稿を募集しておりますので、是非ともお寄せください。

〈標識調査の協力をお願い〉

山階鳥類研究所では、白鳥の標識調査を行っております。首にグリーンの標識をつけた白鳥を見つけた方は、下記にご連絡を。連絡先：〒150 東京都渋谷区南平台8-20、山階鳥類研究所標識研究室、電話03-463-0410





野鳥だより50号を記念して	井上元則	2
会報50号記念を祝う	佐々木 勇	2
会報50号の発刊に寄せて	安田 鎮雄	3
創世紀のころ	百武 充	4
北海道野鳥愛護会と私	羽田 恭子	5
愛護会のあゆみ		6

提言・意見

記念特集号に寄せて(隅田重義)・野鳥だよりを手 して(谷口登志)・今、考えていること(森 拓人) ・50号記念に寄せて(紅林幸子)・50号の重みから (小山政弘)・「愛護会」に期待します(長岡宏幸)	10
--	----

も く じ

総目録	(第1号～第49号)	13
これからのチェックリスト	小川 巖	17
探鳥会報告	鷓川・鷓川・野幌	17
探鳥会案内		19
編集後記		20

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

この特集号のための第1回目の会議は、10月14日に開催いたしました。広報担当の代表である私の仕事上の都合で、その後編集会議をさっぱり開催できず、すっかり予定が狂ってしまいました。

私は、札幌市役所で衛生関係の仕事に携っておりますが、編集作業をどんどん進めていかなければならない時期に大型スーパーの食中毒事故が起き、2ヶ月間は超過勤務の連続で、朝帰りが2～3回、日曜日もちろみ出勤という状態で、心の中では早く会議を開かなくてはと思いつつ第2回目の編集会議を開いたのが約1ヶ月後と完全に遅れてしまい、結局、発行が当初予定より大幅に遅れてしまいました。この場を借りまして会員の皆様に深くおわびを申し上げます。(白沢)

宇余曲折はあったがよくここまで来たものだと思う。私も二年間、編集を担当したことが有るが大変な仕事である。内容を良くしたい。レイアウトも変えてみたいと思っても、年4回を休まず発行するだけで精一杯、あつという間に1年が過ぎてしまう。

全道の会員の活動状況を伝えたい、意見も反映したいと思いつつ、つい札幌中心の誌面になってしまう。編集担当幹事が職場から自宅から電話で原稿の依頼をして集稿しているのが現状で、つい頼みやすい人に頼むという形になってしまう。何とか、各地の情報を定期的に集めるシステムを作らなければと考えている。昨年の総会では札幌以外の人達にも編集担当幹事をお願いするというアイディアが出されたので今年はずいぶん実現したいものだ。連載の企画も何年分かをまとめれば貴重な資料になるといったものを手がけたい。全道会員を結ぶ、唯一の交流の場を何とか有意義なものにしたいと願っています。(小堀)

一時はどうなるかとヒヤヒヤしたもののなんとか50号記念特集を発行することができました。

しかし、発行日は1月中の予定が大幅におくれてしまった、申し訳ない。早くこいこい「野鳥だより」と心待ちにしている方も多いのではないかなと思う。

写真については大部分を道自然保護課、萩 千賀さんからお借りしたので会にとっては貴重なものが数々ある。あらためてお礼申し上げます。

昭和45年2月の誕生から13年目、古い号を読みかえしてみると、正に情熱のかたまりそのもののような号もある。3号くらいまで発行できればよいとの初めの予想をこえて50号まで来た、人間の情熱のすさまじさであろうか。いかに人間にとって自然(野鳥)が必要なものであるか、すばらしいものであるかが伝わってくるようだ。

しかし、鳥たちを取りまく自然は大きく失われつつあり、友のいない未来はクリーブを入れないコーヒーどころではないのだ。(猿子)

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1500円(会計年度4月より)郵便振替 小樽 1-18287

〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会会付 ☎(011) 251-5465